

コラム・介護保険・誕生物語（岩波書店）

介護保険制度は、崖の上に、危ういバランスで、やっとのことで建てられた家に似ています。「福祉にカネをかけたら、日本の経済は潰れる」と思い込んでいる政権与党が支配していた時代だったからです。そのような中、4つの偶然が重なって、この制度は、生れることになりました。

樋口恵子さんのユーモア 「負担・負担と騒ぐな、オトコ」

「偶然」のひとつは、「東大新聞のシバケイ」の名が轟いていた旧姓柴田恵子さんを、人を見る目がない朝日新聞が「おんなは新聞社にはいらん」と不合格にしたことでした。失意の恵子さんは早々と見合いをし、相手に恋をして、刺繍と料理と子育ての日々。ところが、夫君が急逝。その勤め先の広報宣伝課が採用してくれることになり、人の心を掴む、「評論家樋口恵子」が誕生しました。そして、一九八三年、「高齢化社会をよくする女性の会」がスタートすることになったのでした。

「孝行嫁さん顕彰条例」や「模範嫁表彰」の流行、厚生白書の「同居は福祉の含み財産」という表現への女性たちの危機意識。それに加えて、樋口さんならではの四つの作戦で、この運動が全国に広がったと私は推測しています。

第一は、ゆるやかに横につながっていく方法。本部・支部というタテの関係がまったくありません。

第二は、「歎きあう会」から調査活動へ。その広め方がユニークです。家族だけでは介護できない状況を「ジジババも二階だてなり長寿国」「母寝たきり、娘ぼけるや長寿国」「在宅が中心なんて、よく言うよ。給食週一、フロは月一」

第三は、ふつうの主婦だった会員が政治に進出していったことです。全会派を網羅し、「介護の社会化」を目指していました。

第四は、遊びとユーモア精神です。保険料負担に抵抗を感じる女性たちの気持ちを、都々逸や替え歌で変えていきました。

「負担、負担と騒ぐな、オトコ。介護はオンナが、からだで負担」

都はるみの「北の宿から」は、こうなります。

あなた負担はいやですか～

日ごと手足がよわりますう～

来てはもらえぬヘルパーを～

おむつ濡らして待ってます～

公的介護は幻でしょうか～

介護、恋しい、日本の老い～

「涙こらえて」を「おむつ濡らして」にしてしまうのが凄いところです。

毒舌の名人、上野千鶴子さんも樋口さんを称賛していました。「自治体のトップから草の根女性団体まで呉越同舟の集まりを可能にしたこと。抜群の実践力と地に足のついたリアリズム。向日性の華のあるお人柄。余人をもって代え難い方」。

介護地獄と、日本だけにある「寝たきり老人」という概念

「偶然」の二つめは、朝日新聞の論説委員室に女性が一人もいないのは外聞が悪いと幹部が思ったらしく、科学部デスクだった私に、厚生行政の社説を書く役割がまわってきたことでした。

同省の最重要課題が「西暦二〇〇〇年に寝たきり老人が百万人になること」と知り、医学記者時代には取材したことがなかった老人病院を訪ね、養老院カット、うつろな表情で横たわる写真のような「寝たきり老人」に出会い、胸が締めつけられました。解決法を求めて、一九八五年、日本より先に高齢化の進んだ国々を訪ねて、さらに驚きました。「寝たきり老人」を直訳しても通じないのです。その代わりに「ケアの必要な年金生活者」が、写真のように、お洒落し、爪にはマニキアをして外出を楽しんでいました。

鳥の目

同じ1985年

虫の目



↑デンマーク
独り暮らしでも、自宅で暮らし、
お洒落して外出



↑日本
「寝たきり老人」呼ばれ
養老院カット

リケジヨの私の癖は、「なぜ？」を究めることです。そして発見しました。

ホームヘルパーが、朝昼晩訪ねて、ベッドから起こし、食事を助けるだけでなく、お洒落まで手伝ってくれるから独り暮らしでも自宅で暮らせる。ホームヘルパーに大切なのはユーモアがあること。自宅の改造、ヘルパーの手配、自立と誇りを支える補助器具などを、市町村の訪問ナースが手配する。国民ひとりひとりに家庭医という専門医。そして、すべて無料……。

税金は「取られるものではなく、預けるもの」という思想……。そう書いた『「寝たきり老人」のいる国いない国』（ぶどう社）は、三十二刷り、十一万部になり、行政や現場の方々が読んでくださることになりました。

なお、「記者に女はいらない」とっていた朝日新聞が私を採用したのは、翌々年に控えた東京オリンピックの女子選手村が男子禁制。他社に負けたら一大事と、どの新聞社も考えたからでした。

そして、翌年からまた、扉を閉ざしてしまったのです。

デンマークに学び、大蔵省支配を弱めるための介護保険構想

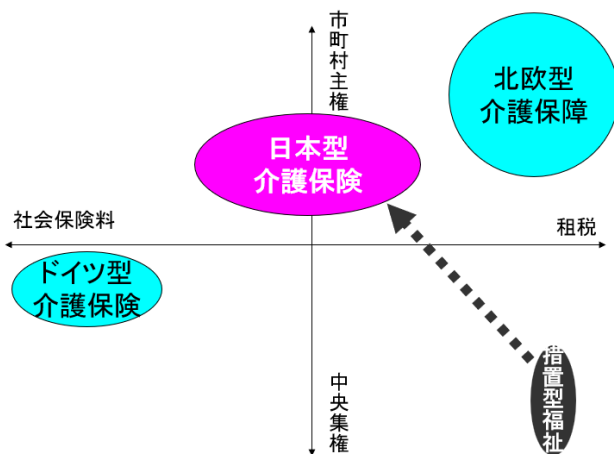
第三の偶然は、「ヨメとボランティアと民間活力」を重視する自民党の「日本型福祉政策」の弊害を、深刻に受け止めた厚生官僚がかなりの数いたことです。日本型福祉の結果として、家族は疲れ、老人病院が乱立し、そこで「寝たきり老人」がつくられていく実態を解決するために、ホームヘルパー十万人計画、寝たきり老人ゼロ作戦、ゴールドプランが打ち出されました。

「介護」と名のついた日本で初めての公的な検討会が厚生省に誕生したのは一九八九年。この介護対策検討会に毎回出席した吉原健二事務次官述べています。「老人ばかりをただ入れただけで過剰な注射や検査をして、やたらに儲ける病院ができてしまった。こういうものをなくさなくては」。

「老人病院も介護地獄もない国・デンマーク」の福祉サービスをモデルに、「どこでも、いつでも、的確で質のよい 24 時間安心できるサービスを、気軽に受けることができる体制」を、「住民に身近な市町村を中心に施策を展開すべきである」という報告書が一九八九年暮れに公表されました。これを引き継いだ高齢者介護・自立支援研究会が九四年七月にスタートする間際、「第四の偶然」が起きました。社会党委員長の村山富市さんを首相に「自・社・さ政権」が誕生したのです。

図は、介護保険の仕組みについて私流に比較してみたものです。

保険それとも税金？ 介護保険・措置制度・北欧、どこが違う？



Y軸は、中央集権的か、市町村主権か。X軸は財源で、ドイツは全額が州の社会保険料、北欧は市町村税、日本は折衷型です。「税金だけにすると大蔵省の支配下におかれて伸びが見こめない。社会保険を組み込むと企業からも財源を調達できる」と厚生労働省の若手官僚は考えたのです。面積は財源の大きさをあらわしています。住民の意向に従って市町村が「上乘せ」や「横出し」をすれば、サービスを増やせる。そこが、ドイツの介護保険や日本の措置制度と違う、という「分権の思想」に、市町村の若手首長

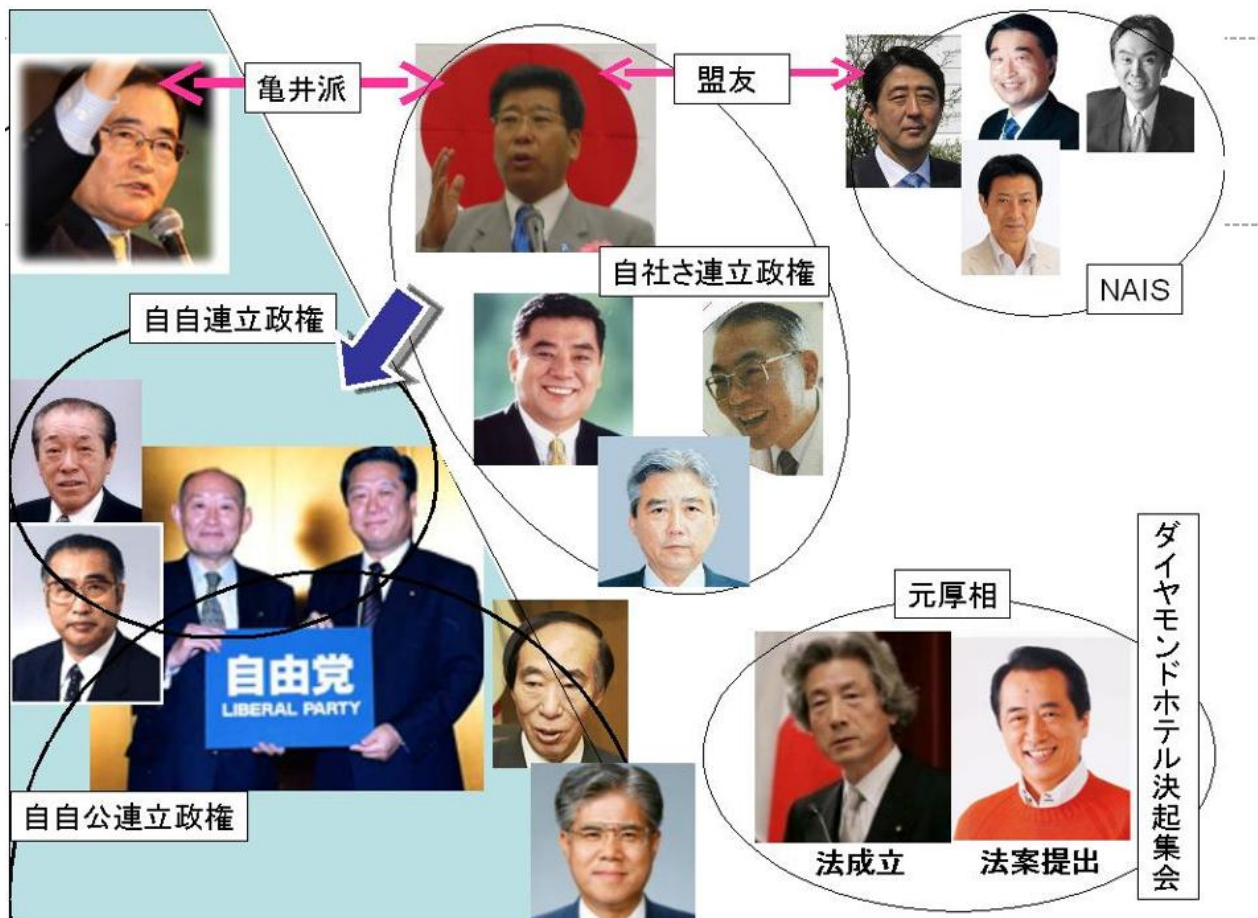
やカリスマ職員と呼ばれた人々は燃えました。

施行直前に、亀風(カメカゼ)と小沢旋風で暗雲が。。。

永年与党だった自民党は亀井静香氏に象徴される「ヨメの介護こそ、こころ暖かい」「介護の社会化？とんでもない」という議員が主流でした。それを押さえて介護保険法案を政府提案でこぎつけることができたのは、「さきがけ」と「社会党」が与党内に入ったからでした。

ところが一九九八年、「自社さ」がくずれ、自民単独をへて、一九九九年小沢一郎氏率いる「自・自

連立政権」という政治力学の中で介護保険凍結論がにわかに浮上しました。行数がつきてしまったので、詳しくは『物語・介護保険』(岩波書店)をどうぞ。



私は、九〇年代から、大蔵省のつくった国民負担率という「ことばの呪い」から人々が解放されるために、「国民連帯率」と呼ぶことを提案してきました。

理由の一つは、「負担」という言葉は、人々の心に税への嫌悪感を植えつけること。

第二は、大蔵省のいう「国民負担率」には、老後や教育のための貯金、生命保険、住宅ローン、教育ローンなどの金銭的負担に加えて、肉体的負担、精神的負担などが含まれていないからです。しかも、国債というかたちで子孫にツケをまわしています。

理由の第三は、税金を「連帯」のあかしと考え、私の定義の「国民連帯率」の高いデンマークは、税金は高くても、ヘルパーさんが別荘をもち、海外へのバカンスを楽しんでいます。

そして、経済も順調、財政も黒字、国民の幸福度も高いからです。